

# ロボカップ 2010 シンガポール世界大会レポート

今年で14回目となるロボカップ2010シンガポール大会 (RoboCup2010 Singapore) は、6月19日から25日まで、シンガポールのサンテックで開催された。日本からは、シニアリーグに27チーム、ジュニアリーグに22チームが参加した。

林原 靖男 (千葉工業大学) / 谷村 育子 (国際レスキューシステム研究機構)  
大橋 健 (九州工業大学) / 伊藤 暢浩 (愛知工業大学) / 中島 智晴 (大阪府立大学)  
中川 友紀子 (株式会社アールティ) / 野村 泰朗 (埼玉大学)

## ロボカップサッカー

### ヒューマノイドリーグ

#### キッズサイズリーグ

キッズサイズリーグは、60cm以下の自律型のヒューマノイドロボットでサッカー3on3などの競技を行うリーグである。今大会では世界から集まった19チームが4日間の熱い戦いをを行った。優勝は昨年に引き続き「Darmstadt Dribblers」(ドイツ)で、全試合を通して失点が1点という圧倒的な強さを見せつけた。頭のカメラでロボットの位置を推定しているが、精度の高さが際立っていた。キックオフの時にライン前にビタッと並ぶなど、位置検出に関して不安定な動きが全く見られなかった。また、敵とボールを挟んで対峙した時など、横にボールを軽く蹴り出して、試合を有利に運ぶなど、戦略的にも抜きん出た動きを見せていた。



ヒューマノイドリーグ・キッズサイズリーグ

日本からは、「CIT Brains」(千葉工業大学ほか)、「Jeap」(大阪大学)、「StiK」(金沢工業大学)が参加した。ジャパンオープンで優勝した「CIT Brains」は予選を順調に勝ち進んだが、準決勝で昨年度敗退した「FHumanoid」(準優勝)に今年も敗退して3位に終わった。今年は、昨年度に比べて0-0という試合が少なく、全体的に技術の進歩が見られた。ただし、1位から3位までは、昨年度と同じ順位であり、これらのチームにどこまで迫れるかが今後の課題になると思われる。

#### ティーンサイズリーグ

ティーンサイズは1m以上のヒューマノイドロボットを対象とした競技で、今年からルール改正によりサッカー2on2が行われた。大型ヒューマノイドで体をぶつけ合いながらサッカーを行う競技のため、今年は4チームのみのエントリーとなっ



ヒューマノイドリーグ・ティーンサイズリーグ

た。優勝は昨年度も優勝した「NimbRo」(ドイツ)で、準優勝は「CIT Brains」(千葉工業大学ほか)であった。共に予選ではほぼコールドで勝利して決勝で対峙したが、「NimbRo」は圧倒的な強さを見せつけて、決勝でもコールドで勝利した。準優勝の「CIT Brains」はテクニカルチャレンジ(徒競走、スローイン、障害物ドリブルのポイントを競う)では、高得点をたたき出し、この部門では1位となった。

#### アダルトサイズリーグ

130cm以上のヒューマノイドを対象に新設されたリーグで、従来のティーンサイズで行われていたドリブル&キックで競技が行われた。エントリーは5チームで、「Team RO-PE」(シンガポール)が優勝した。ただし、このサイズで熱い戦いを繰り広げてきたチームがティーンに移行したため、0-0の試合が目立つ結果となった。

ルイヴィトンカップが与えられるベストヒューマノイドには、ティーンサイズリーグ優勝の「NimbRo」が選ばれた。実際に1m以上のロボットがサッカーをする様子は見ていて圧倒されるものがある。来年度はより白熱した戦いが見られると期待したい。ロボカップの目標である「2050年にワールドカップのチャンピオンチームに勝つ」という目標に向かって新たな一歩を踏み出したことを感じられる試合であった。

### 標準プラットフォームリーグ

RoboCup 標準プラットフォームリーグ (RoboCup Standard Platform League、

以下 SPL) は、AIBO ではじまったリーグだが、AIBO の生産終了をうけて、4足ロボットリーグの後継として、Aldebaran Robotics 社製小型人型ロボット NAO

RoboCup edition を標準ロボットとして使用しているサッカー競技である。SPL の1チームは3台構成であり、腰にピンクかブルーのチームマーカーをつけ、オレ